

全体の歌われ方の高低、その音節の歌われ方に於ける長短、又はその両方による音変形を反映したものとみるのが妥当であると思われる。或はそのように一句中であって一定しないという、一部曲節の自由のあること自体が、古代歌謡を想わせるものなのかも知れない。

要するに、曲節が関係すると考えられるのであるが、その本質の解明に当っては、変字の範圍を、歌謡一首中よりも今少し拡げて扱い得るよう、用字グループの、特にその使用漢字音を詳しく知る資料の存在する漢音系の仮名の間にあつての発見が、望ましいことである。

(五五年二月)

注1 山田英雄「日本書紀」(歴史新書) 七五頁以下など

注2 森博達「日本書紀」歌謡における万葉仮名の一特質―漢字原首より見た書紀区分論―」(「文学」四五卷二号)

注3 宮沢縦一編「明治は生きている」(音楽之友社) 二六二頁・「歌謡よりの歌詞聞きとりについての試み―日本歌曲Ⅰ―」(東海女子短期大学紀要第五号)

注4 高木市之助「変字法に就て」(「吉野の鮎」)

注5 他の筆録資料そのままを使用している可能性を考えてのことである。

注6 「神楽歌重種本の変字」(東海女子短期大学紀要 第六号)

注7 田辺尚雄「声楽とことば」一五〇頁(大月書店講座「日本語」Ⅲ)など。

二五三 柯舸箇

次にこれら変字の差異が、いかなる事実の反映とみられるかという

ことになる。この α 群中の歌謡の場合、同一句、類似句の反覆に見られるというのであるが、それを語にまで拈げてみても、約一〇に過ぎず、存在しない場合もかなり多く、むしろ間々見られるというのが適當のように思われる。しかし、その様相は、平安時代の古歌謡の万葉仮名表記によく似たものがある。漢字音の四声はまづ高低を示すものとして考えられようが、日本の古代歌謡類の音声の聞えを考慮に入れた場合、その音声の長短、強弱、連音によって生ずる変形が著しく目立つことがあるようである。旋律もことばのつけ方も、所謂西洋のそれに比しかなり自由な部分が多くあったことが考えられる。よって曲

即ち、一二七では平と上が逆になり、九一では一本の用字を用いるのであるが、短歌体の二句と五句で反覆する場合の変字は、大体に於て二句が上、五句が平となる傾向のあることが考えられる。同一の語であり、同じような使われ方なのであるからアクセントの相違とはみられないし、その句の中の一定しない位置の、一部に於ける書き分けであつてみれば、共通した曲節との対応は考えられない。よつてその句

・陀 平一 駄 去一・平一	・波 平一 播 去一 婆 平一	モ	・謨 平一 母 上一・平三
・多 平一 柁 上一	・波 平一 播 去一 婆 平一	・謀 平三 母 上一・平三	
ダ	・儻 去一 娜 上一	・謨 平一 慕 去一	
ツ	・都 平一・上一 靚 上一	・謀 平三 慕 去一	
テ	・堤 平三・平四・上四 底 上四	・慕 去一 暮 去一 謀 平三	
ト甲	・圖 平一 度 去一・入一	母 上一	
ト乙	・登 平一 等 上一	ヤ	・夜 去四 野 上三・上四
・騰 平一 等 上一	・毗 平四	ヨ	・余 平三 與 上三
・騰 平一 藤 平一	比 平四・上四・去四・入四	ラ	・羅 平一 囉 平一
ナ	・儺 平一 那 上一・去一・平一	リ	・梨 平三・平四 利 去三
・儺 平一 乃 上一	フ	・梨 平三・平四 里 上三	
那 上一・去一・平一	・符 平三 賦 去三	・梨 平三・平四 理 上三	
ニ	・爾 上三 爾 上三	・梨 平三・平四 理 上三	
・尼 平三 爾 上三	・符 平三 輔 上三	・利 去三 里 上三	
ハ	・波 平一 播 去一	ホ	・哀 平一 報 去一
・婆 平一 播 去一	マ	・麻 平二 麼 上一	
・婆 平一 播 去一	・魔 平一 麼 上一 麻 平一	・梨 平三・平四 唎 去三	
・婆 平一 播 去一	磨 去一・平一	・梨 平三・平四 利 去三	
・播 平一 簸 上一・去一	莽 上一 麼 上一 麻 平二	唎 去三	
・波 平一 婆 平一 播 去一	魔 平一 磨 平一・去一	ル	・流 平三 屢 去三
・波 平一 播 去一	ミ	ヲ	・烏 平一 乎 平一
簸 上一・去一	・彌 平四 美 上三		
	・彌 平四 美 上三		

※原文「絶」、日本古典文学大系、古代歌謡集による。

右の三字以上のものについて、存在する歌謡番号及びその音節数は、
 番号 音節数
 九六（一七八）
 波婆播、比毗避、梨唎利、祁枳稟企、志斯絶矢泊、
 莽麼麻魔磨

その一部に曲節を異にする場合がよく見られるようである。とすれば漢字音と対応する分子が多いと考えられる初期の万葉仮名表記にあつては、その使用された漢字の音からみて、その間にいかなることが認められるのであろうか。

ところで前記森博達氏の α 群にあって、その中に含まれる歌謡の麥字に、四声、等位にかなり性格的なもの、即ち対立の類がみられるのである。次にそれを示す。

假名四声等位

ア　・阿　平一　婀　上一・平一

イ　・伊　平四　以　上三

ウ　・宇　上三　禹　上三

エ　・于　平三　禹　上三

オ　・於　平三・平一　飫　去三

カ　・柯　平一　荷　上一・平一

キ　・柯　平一　箇　去一

ク　・柯　平一　舸　上一

ケ　・柯　平一　可　上一

コ　・柯　平一　舸　上一　箇　去一

ガ　・鵝　平一　我　上一

ギ　・峨　平一　我　上一

キ甲　・祗　平四　企　上四・去四

キ乙　・祗　平四　枳　上三

キ丙　・岐　平四　枳　上三

・祁　平三・上三　企　上四・去四

枳　上三　棄　去四

ク　・俱　平三　矩　上三

ケ甲　・稽　平四・上四　啓　上四

コ甲　・故　去一　古　上一

コ乙　・據　去三　舉　上三

・渠　平三　舉　上三

・居　平三　舉　上三　據　去三

サ　・娑　平一・上一　左　上一・去一

・佐　去一　左　上一・去一

シ　・之　平三　旨　上三

・之　平三　思　去四・平四

・之　平三　施　去三

*
・純　平三　始　上三

・斯　平四　始　上三

・斯　平四　思　去四・平四

・之　平三　指　上三　戸　平三

・斯　平四　旨　上三　志　去三

・斯　平四　思　去四・平四

志　去三

・之　平三　斯　平四　志　去三

資　平四

・之　平三　斯　平四　志　去三

伺　去四・平四

・斯　平四　志　去三　繩　平三

矢　上三　洎　去三

セ　・栖　平四・去四

西　平四・上二・去二

ソ乙　・曾　平一　賊　入一

タ　・陴　平一　掩　上一

表Ⅲ

ア	阿阿	チ	知智 智致 知智池
イ	伊異 伊以 伊易	ツ	都屠 △都靚 都菟
ウ	宇于 △宇禹 △于禹	テ	△底堤
オ	飫於	ト甲	妬渡 △度圖
カ	伽介 伽箇 伽訶 箇介 箇柯 柯舸 加訶 △可柯 訶訶 柯哥 △柯舸箇	ト乙	等苔 △等登 △等騰 登鄧 △騰藤
ガ	餓鵝 △我鵝 △我峨	ナ	那儺 奈儺 奈那 △那儺乃
キ甲	岐枳 岐祗 枳企 枳祗 枳耆 枳吉 企耆 △祁枳企棄	ニ	爾爾 △爾尼
キ乙	機幾氣	ネ	泥尼
ク	俱矩 俱勾 區久 區玖 區勾 區句 區俱 句區鈎	ノ	能廼
グ	愚遇	ハ	波破 波播 波幡 波泮 婆播 △婆幡 △波婆 △播簸 波破播 波婆播 波播簸 △波播麼婆
ケ甲	△稽啓 祁家 鷄雞	バ	△麼魔 麼磨
ケ乙	開概	ヒ甲	比毗 比臂 比譬 △比避 避譬 毗臂 △比毗避
コ甲	△古故	フ	△符賦 △符府 △符輔
コ乙	虛許 許居 △舉據 △舉渠 △舉居據	ホ	費倍 保陪 △報裒
サ	佐娑 左瑳 佐瑳 △左娑 △左佐 作沙 佐瑳舍	マ	莽摩 莽麻 摩麻 摩磨 魔摩 △麼麻 磨末 △麼磨麻魔 △莽麼麻魔磨
シ	之辭 之志 之始 之旨 志辭 志斯 之試 △之思 △之施 始志 △始斯 △始絶※ △斯思 之始辭 △之指尸 △志思斯 △志斯旨 △志斯之資 △志斯之伺 △志斯絶矢洎	ミ	彌瀾 彌美 瀾湄
ス	素須 須輸周	ム	牟務
ズ	儒孺	モ	毛茂 △母謀 母謨 毛莫 慕謀 △慕謨 毛母 毛望 茂望 暮望 △慕暮母謀
セ	△西栖	ヤ	椰椰 夜椰 夜榔 △夜野
ソ乙	曾層 △曾賊	ヨ	余與 余豫
タ	多拖 多陀 拖拖 多哆 多駄 哆駄 △陀駄 △多拖陀	ラ	羅囉 羅邏
ダ	襁太 △襁娜	リ	△利梨 利離 △利里 △利理 △梨理 △梨唎 △梨唎利
		ル	△屢流 屢漏 屢流留
		ワ	和沍
		ヲ	烏鳩 △烏乎

・ ※ 純か。

・ 古写本・訓のつけ方などについては考えず。

変字といわれている仮名の使用は、書紀の歌謡一二七首の中、一二首に存在し、巻、歌謡等による偏在は認められない。又、そのないものは△表Ⅰ▽にあげた如く、音節数の少ない、即ち短い類にみられる。(全体の平均音節数四二、変字のないものの平均二八、二〇音節以下の歌謡七首中、四首が入っている。) 存在する音節の種類は全歌謡のほぼ半ばを占める短歌の歌体で平均二、音節数の最も多い七首については△表Ⅱ▽の如く、短歌体の二倍の音節数六〇の前後では平均

表Ⅰ

番号	巻		音節数	反 覆 の 数
10	(3)	β	29	句 2
15	(5)	β	37	語 1, 句 1
19	(5)	β	30	0
20	(5)	β	32	0
25	(7)	β	18	0
26	(7)	β	19	0
41	(10)	β	51	0*
42	(11)	β	31	0
44	(11)	β	19	0
49	(11)	β	32	語の一部 1
67	(13)	β	30	語 1
82	(14)	α	32	語 1
88	(16)	α	19	0
107	(24)	α	31	語 1
111	(24)	α	31	語 1

* 囃しことば1あり

表Ⅱ

音節数	音節の種類	変の ある 音節数	番号・巻
178	45	17	96・17
142	37	13	75・14
117	48	13	97・17
111	43	4	43・11
89	36	6	102・22
95	38	9	28・9
90	38	9	7・3
90	38	5	94・16

五である。よってそれは必然的に含まれる音節の種類も多くなる、音節数の量によるものとみてよいであろう。

次にその存在する音節の種類は、八三種の音節中、

エ(ア行) ソ 甲 ヒ 乙 ヘ 乙 ミ 乙 メ 甲 メ 乙 ユ
 エ(ヤ行) レ ロ 甲 ロ 乙 巾 エ ギ 甲 ギ 乙
 ゲ 乙 ゴ 甲 ゴ 乙 ザ ジ ズ ゼ ゾ 乙 ヂ
 ツ デ ド 甲 ビ 甲 ビ 乙 ブ ベ 甲 ボ

の三三種を除く五〇である。そこに音の性格による特色、傾向の如きは認められない。尚、その使用概数を見ると、最高二六九(ノの乙類)であり、一〇〇以上のもの二一種を数え、変字のないのは三〇以上の四種の他はいずれもそれ以下で、平均は約一五である。よってこれも音節数の量によるものとみられる。

以上、書紀歌謡の変字はすべての音節に共通して存在しうるものと考えられる。△表Ⅲ▽にその存在と文字を示す。下の線はα群にあるもの、△印は一首のみに用いられるものである。

日本書紀歌謡の変字

中村直子

同一の音韻に対し、多数の文字を持つ万葉仮名の複雑な様相を解明する方法の一つとして、その文字使用の性格によってグループに分け、その各々の中に於て見てみる^{註1}ことが考えられる。日本書紀三十巻内の区分は諸家によってなされているが、歌謡のみについては森博達氏の仮名とその漢字原音との対応状況の調査による、

α群 原則として漢字原音(唐代北方音)に基づいた仮名による――
卷十三以前の巻及び二二・二三巻

β群 既成の仮名を少なからず利用した、即ち漢音系の仮名と呉音系の仮名の混在等、種々のケースを想定し得る、――巻十四以後。但し二二・二三巻を除く^{註2}。

に、二分するものがある^{註2}。

書紀の仮名の使用例は多くが歌謡によって占められている。歌謡の言語表現はその性格上、一般の言語とは異なったものがあり、具体的な表現である歌唱のみから歌詞を聞きとるのは、特にそれが伝唱による短いものである場合など、かなりむづかしいと思われる^{註3}。とすれば一三〇首近い量のその筆録に、本文の執筆者が直接当らない可能性が考えられようし、編纂の際の資料としてのその表記に多く手を加えることがなかったとみることも出来よう。よって歌謡は他の部分と分けて、筆録という立場から一応見直してみる必要があると考える。

ところで前記、森博達氏の区分の場合、歌謡に使用された仮名の種類約四五〇中、αβ両群に用いられているもの一三四、しかも両群への分離の傾向のかなり明瞭なものもあるが、その多くは使用頻度の多い類のもので、延べ用字数の約六五%がそれ等の仮名によって占められている。又、数種の使用頻度の低い仮名が、連続する数首に多く存在する例、一つの伝承中に複数の歌謡を含むもの等が見られ、更に両群を分類出来はしないかと思わせる。よってまづ確実に同一の筆録者による^{註4}と考え得るものを扱うことにする。

この立場によれば、その最小の単位として、一首の歌謡があげられるが、そこには変字法といわれる、同一句又は類似句の反覆に於て一部の文字を変えて用いる^{註4}ということがある。これは従来のようにことばを精密的確にうつすという用字上の意味とも、音韻とも無関係であるとのみ考えられるものなのであろうか。

一

一首の歌謡中に於て、同一の音韻に対し、二種以上の仮名の使用されている状態をみる。本文、歌謡番号、訓は大野晋氏『上代仮名遣の研究』の後篇八日本書紀歌謡及び訓注語彙総索引中の「本文篇 歌謡の部」により、一二三番については定訓とされるものがないので除く。又、本文及び訓に問題のある場合は、その箇所が関係する際のみ扱い、書写に於て生じがちな、字形の相似、同音語を写すことによる誤記の類は含んでおくことにとどめる。尚、一云、一本の部分は扱わない^{註5}。